

富士山噴火の痕跡を巡る(その6)

ー富士山東麓を流れ下った最終氷期の火山泥流の行方ー

〈静岡県富士山世界遺産センター 学芸課 教授 小林 淳〉

前回、私が担当したコラムでは、最終氷期のおよそ2万2千年前に富士山北斜面で発生し、桂川^{かつら}と相模川を流れ下って相模湾に達した火山泥流^{でいりゅう}(富士相模川火山泥流)について紹介した(「富士山世界遺産コラム」33号、令和7年2月)。これと同じ最終氷期に発生した火山泥流堆積物^{はぶな}は、山頂をはさんだ反対側の西麓～南西麓に連なる羽鮒丘陵と星山丘陵でも観察することができる。この時期の富士山は、標高の低いところまで氷雪に広く覆われ、加えて、現在より地下深くまで凍り付いていたことから、大量の氷雪が一気に融けて流れ下る火山泥流は山麓全方位に広がった可能性が高い。

今回紹介する富士山噴火の痕跡は、富士山東麓の小山町にある道の駅「ふじおやま」から国道246号線を山北町(神奈川県)方面に2kmほど坂道を下った地点にかつて露出していた。調査当時(2020年5月)、国道脇の北側斜面に続く小沢が大きく崩れ(図1左)、その崖に富士山の降下火砕物^{かさいぶつ}や大小雑多な砂礫^{されき}で構成される地層が遠望でも見えた(図1右)。なお、この崖はその後の復旧工事によって保護され、現在は地質状況を観察することはできない。

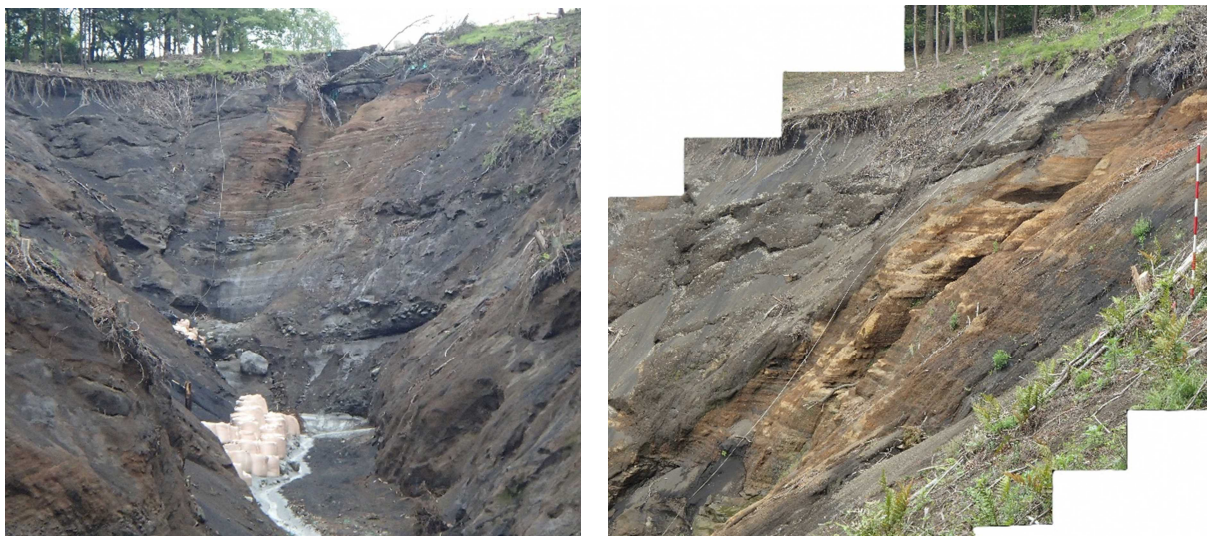


図1 国道246号沿い(駿東郡小山町湯船)に露出していた地層

地質調査は施工主から許可を得て実施した。小沢を数10m登って崖を見上げると、地表まで約40mの堆積物が続き、その上半分は降下火砕物と風化火山灰土からなる茶褐色の地層で、最上位には宝永噴火による厚さ約1.5mの火砕堆積物が見えた。一方、下半分は礫混じりの砂^{れき}を主体とする河川堆積物であり、この中には角張った巨礫^{きよれき}が混じる弱い層理^{そうり}を伴う砂層や、細かな泥層とシルトの薄層を挟む地層を含んでいた(図2左)。この堆積年代は最終氷期中の3万年前ぐらいであろう。特筆すべきは、この砂層には長径数cm～10cmのシルトの角礫が含まれ、これが水平方向に長軸を有したまま配列していることである(図2右)。このような層相・構成物の特

徴から、この河川堆積物を形成した流れは非常に速くて強い火山泥流であり、時折静穏な^{よど}澱みの状態を挟みながら何度も繰り返して流れ下ったことがうかがえる。

では、この火山泥流はどこで発生し、どこまで流れ下ったのであろうか。火山泥流の堆積物の主体をなす粗い砂は富士山の火山灰(スコリア含む)であることから、富士山側の斜面を出発点として流れ下ったと考えられる。麓に達した火山泥流は、低地に堆積するシルトを取り込みながらさらに流れ下ったのであろうが、ここより東側にはこの堆積物を追跡することができない。酒匂川^{さかわ}(静岡県内では鮎沢川^{あゆざわ})沿いには火山泥流によって埋積^{まいせき}されたことを示す地形も残されていない。このことから、火山泥流は、酒匂川ではなく、富士山東麓を駿河湾に向かって流れ下ったのであろう。

この火山泥流は、富士山東麓の川の流れを変えるきっかけになった。その後、約2万年前に発生した山体崩壊に伴う岩屑^{がんせつ}なだれ(馬伏川岩屑なだれ)も富士山東斜面から東麓を厚く埋め立て、酒匂川・鮎沢川下流側からの河川浸食を促進した。これらの結果、酒匂川・鮎沢川の浸食最前線は長い期間をかけて富士山東斜面に到達し、現在は富士山の山頂火口縁の一部を含む東斜面のごく狭い範囲が酒匂川流域に属することになった。よく疑問を投げかけられることだが、富士山ハザードマップにおいて、溶岩流の影響範囲(避難範囲)に酒匂川沿いから足柄平野の一部が含まれるのはこのためである。



図2 小沢の底に露出する地層(人物は山梨県富士山科学研究所の研究員)

